

國語讀本

高等學校用

卷八

福岡第一師範學校
(學校圖書)

登錄 番號	第	號
社會科學門		
教育部		
教授法	款	國語 項
目		次
全	冊ノ内第	冊
分類 番號	第	號

372.82

24589

T1A3
10
Ts21

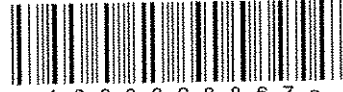
47708

文學博士 坪内雄藏著

國語讀本
高等小學校用
卷八

東京
合資
會社
富山房藏版

圖書 和圖書 溯



a 1 3 8 0 3 2 8 8 6 7 a

福岡教育大学蔵書

卷八 目次

第一課 人間の目的……………一	第十三課 同……………(下)……三十一
第二課 職業の選擇……………三	第十四課 世界周遊(四)……………三十三
第三課 孝子ヒール(上)……………四	第十五課 海外の出發ぎ……………三十六
第四課 同……………(下)……………七	第十六課 本國の大財産家……………三十九
第五課 世界周遊(三)……………九	第十七課 度量衡の原器……………四十一
第六課 夕照……………十三	第十八課 短篇一束 <small>加賀千代 巨電 傳</small> ……………四十四
第七課 日蝕月蝕……………十四	第十九課 安宅……………四十六
第八課 土質……………十七	第二十課 維新の三傑……………五十
第九課 高産……………十九	第二十一課 政治組織(一)……………五十三
第十課 蘇武……………二十二	第二十二課 同……………(二)……………五十五
第十一課 陸軍兵の生活 <small>(附)</small> ……………二十五	第二十三課 憲法……………五十六
第十二課 十錠銀貨の來歴談 <small>上</small> ……………二十八	第二十四課 世界の三聖……………五十九

國語讀本 高等小學校用 卷八

第一課 人間の目的

凡そ人は活動を其の本分とす。食は人が爲めに生れたるにあらず、眠り又は遊ばんが爲めに生れたるにもあらず、活動せんが爲めに生れたるなり。食ふは、滋養の爲めなり、眠るは、休養の爲めなり、遊ぶは、保養の爲めなり。要するに、心と體とを壯健ならしめて、活動を自在にせんと欲するのみ。

活動とは業務の總稱なり。地を耕すも、活動なり。製造業に従事するも、活動なり。學理を研究するも、活動なり。惡人の行爲も、活動なれば、善人の所業も、活動なり。活動の種類は、千差萬別なり。

人と生れては、賢愚の別なく、何事かの活動を爲さざるものなし。只、其の心だてに、高卑の差あるが故に、自ら、其の着眼に、高卑の別を生じ、延いて、其の目的たる活動の高卑をも生ず。私利を營むをのみ、目的とす

雲泥

るもあれば、國利、公益を圖ることを、一生の志となすもあり。楠木正成も、足利尊氏も、共に、武將として、活動したりき、されど、其の目的には、雲泥の相違ありき。農夫、商人の名高きは、古今に夥し。されど、鹽原多助、二宮尊徳の心がけを、其の志となす者は、多からざるなり。

然らば、如何にせば、高尚なる活動をなすを得べきか。

答へて曰はく、第一には、自分勝手一方の

※ ※ ※ 秘訣

慾心を去るべし。第二には、常に他人の心中を思ひやりて、及ぶ限り、深切を盡さんとの心がけを磨くべし。第三には、國利、公益を、最終の目的として、事業に志し、おのれが生れつきの長所に向つて、其の一生の全力を傾注すべきなり。是れ、實に、人たる者の本務にして、亦た、其の成功の秘訣なり。
これを要するに、高尚なる活動をなさんと欲せば、先づ、第一に、おのれが長所と、短所とを知らざるべからず。次に、其の長所

に應じて、職業を選ぶこと、肝要なり。

第二課 職業の選擇

※ ※ ※ 天稟

人の生れつきの同じからざるは、其の面の如し。人毎に、生得の長所、短所あり。或力量は、教育を俟たずして發達す、之れを、其の人の天稟といふ。生れながらにして、筋力の秀でたるもあれば、智力の、取りわけて優れたるもあり。例へば、畫才は、ウヰットの天才なりき。彼れは、習はずして、能く畫き

き。かゝる例は、音楽者にも、學者にも、工人にもあり。

※ ※ ※ ※ ※

佛のナポレオンは、能はずといふ語をしりぞくべし、と言へり。又、精神一到せば、何事か、成らざらん、といふ古語あり。げにや、正當の手段を整へ、長き年月を費し、多くの艱難に堪へ、たふれて後ち止むの決心を以て、事に當らば、天下、全く成し難き事は、蓋し、稀ならん。而も、是れを、その短處に向つて試みんは、不利益なる勞苦ならずや。同じ準

備と、同じ年月と、同じ決心と、同じ忍耐とを、其の生れつきの長所に向つて注がば、如何。其の功、正に、幾倍すべきにあらずや。

※ 終活

塙保己一の才と、根氣とを以てしても、天稟に適せざれば、如何ともしがたし。保己一は、音曲、鍼治等に、おのゝく、四年を費して、尚ほ、何の修め得たる所もなかりき。勞多くして、功少かりしなり。ウエスト、元信の如きは、天稟の畫工なれども、若し、勉強せば、相應の商人、工匠となり得べし。然れども、到

* 底グールド、カーネギーの如き大商人とは
 * なるべからず、飛驒の工匠の如き名人とは
 * なるべからず。其の故、他なし、生得の長所
 * に背けばなり。

* 職業を定むるは、運を定むるに等し。一
 * 生の浮き沈みは、職業の適否に因ること多
 * し。人は、其の職を選ばざるべからず。

第三課 孝子ビール（上）

倫敦ロンドンの場末の裏屋の一間に、ビールは、お

* づらつてゐる母親の看護をしながら、枕もと
 * に坐つて、しんぼりとしてゐる。けふは、もう、
 * パンも無く、錢も無い。ビールは、けさから、
 * 何もたべねど、平氣で、介抱はしてゐるもの
 * の、これからさきは、どうなることかと、心細
 * くてならぬ。

* 涙ぐんで、そつと立ちあがつて、窓ぎはに寄つて、外
 * を眺めてゐると、向うから、旗を先に、賑やか
 * に、喇叭、太鼓で囃したて、音樂會をふれて
 * 來た。マリブラン女史といふ、名高い唱歌

師が今夜、さるところで、新曲を歌ふ、といふ
前觸れであった。

ピールは、ふと、去年、マリブラン女史が歌つ
た或小歌が、一枚摺りになって、何萬枚となく
賣れた噂を思ひだした。自分が、母の介抱
のかたはら、こしらへた小歌がある、若し、女
史に歌うて貰ふことが出来ようものなら、
すぐにも、立派な賣物にならう。若し、さう
なれば、母親の薬も、食物も、思ふまゝに買は
れようものかと思つた。一所懸命に頼んだ

ら、きいてくれさうなものと思つた。さう思
ふと、子供氣に、もう、寸分の猶豫も出来ぬ。
机の引出から、紙を捜し出して、ペンを走ら
せて、自作の歌を書いた。そして、寝て居る
母の顔を眺めて、すぐに、うちを駆け出した。
マリブラン女史は、或ホテルの一室に、休
息してゐた。すると、見も知らぬ子供が尋
ねて來た。頬の赤い、黄色なちぢれ毛の肩
にかゝつた、可愛らしい、十ばかりの男の子で、
臆面する様子もなく、女史のすぐ前まで來

て、一禮した。

「母様が、この間から、わづらつてゐれど、けふからは、薬を買ふ錢も、パンを買ふ錢もない。お慈悲に、此の歌を歌うて下され。さうしたら、本屋さんに頼んで、一枚摺りにして、賣子になつて、錢を貰ふつもり」といって、巻いた紙を出した。

女史は受取つて、口のうちに讀んでゐたが、やがて、驚いた體で、ピールの顔をながめ、お前が、これを作つたのかえ、まゝ」と、しきりに、感

心し、さて、幾たびも讀み返して、よろしい。

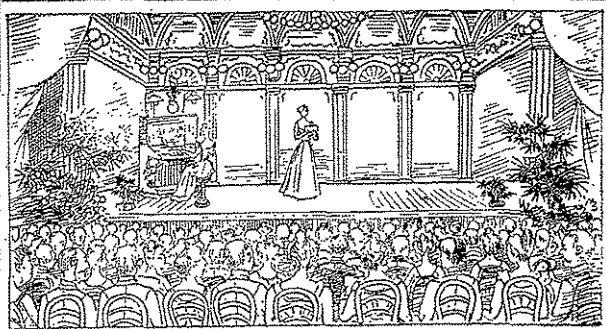
今夜、これを歌ひませう。そして、お前も、音樂會へおいでよ。といへば、ありがたうございますけれど、母様が一人で、寂しからうゆゑ。といふ。かゝさんのところへは、私の方が、看護人をやりませう。案じぬがよい。是非おいでよ。といつて、若干の金子と、音樂會の入場券とを與へた。

ピールは、夢かとはかり喜び、途で、母のたべる物や、薬を買つて、飛ぶ様にして、家に歸つた。

第四課 孝子ピール(下)

夜に入つて、ピールは、母に勧められて、音樂會へ行った。かういふ立派な場處へ出たのは、生れてから始めてゝあった。幔幕や、舞臺の飾りは、目がくらむ程に、はてやかで、美しく、それに、いろくの色の電燈が、八方に輝き、剩へ、右も、左も、立派な歴々の人たちは、かりで、金の眼鏡や、金の鎖や、指輪や、腕輪が、きらりと反射し、こゝろかしこで、絹と絹の

＊ 壇 ＊ ＊



すれあふ音が聞こえる。やがて、幕が上ると、賑やかな音樂が始つた。數番の演奏がすむと、最後に、マリブラン女史が、しづくくと壇に現れた。拍手の音は、會場を震ふばかりに起こる。ピールは、思はず、息を止めた。あゝ、いったものの、本當に、自分の作つたのを、歌つ

てくれるか、どうか、と氣がもめてくならぬ。

女史は、一禮して、靜かに歌ひ出した。や、嬉しや、自分の作つたのだ。ピールは、思はず、我れと我が手を握りしめた。高く、低く、緩く、はやく、物哀れな調子で歌ふ女史の美音に、満場、さながら、水を打つた様。曲の進むにつれて、聴衆の目は、涙に曇つた。やがて、拍手、大喝采は、音樂堂を動かした。

ピールは、會場を出て、うちへ歸つたが、心は

う、とりとなつて、足は、雲を踏むかの様で、錢の事は勿論、誓くは、母のことさへも、忘れた。

翌朝、マリブラン女史は、ピールの家へ來た。昨夜の歌を、或書肆が、三百磅ポンドで買つた、と知らせて、其の金子を、残らず與へた。

母親は、あまりの意外と、女史の深切とに感じて、只、泣くのみであつた。

ピールは、成人の後ち、立派な作曲家になつた。

マリブラン女史が、倫敦ロンドンで病死した時、始

*

*

終、その枕元についてゐて、兄弟も及ばぬ看護をしたは、此のピールであつたといふ。

第五課 世界周遊(三)

英國倫敦より、汽船に乗り込みて、テムズ河を下り、やがて、北海に出づ。さて、ベルジヤム、和蘭を、右に見て、東航し、デンマルクの半島を一周して、バルチック海に入り、魯西亞の首府セント・ピートルスブルグに達す。この航程、およそ四日半なり。

* 儼然

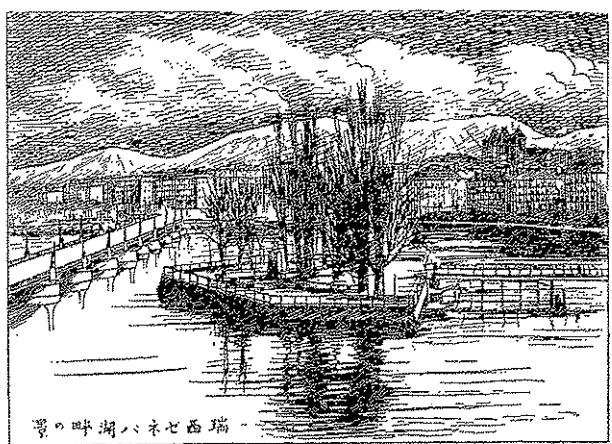
セント・ピートルスブルグは、今より、凡そ二百五十年前、ピーター大帝が、魯國を經營して、儼然たる一大強國となし、時に、建設せしものにして、その宏壯なること、多く、英佛の大都に譲らず。この邊の季候、甚だ寒冷にして、こゝの秋の寒さは、英國の嚴寒に當るほどなり。且つ、晝夜の時間に、大差あり。こゝより、二百里許北なるラブランドには、前半年は、悉く晝にして、後半年は、悉く夜の處あり、といふ。

遠 * *

セント・ピートルスブルグより、汽車にて、十二時間、一直線に、東南に走れば、モスコイ府に着す。こゝは、魯西亞の舊都にして、嘗て、ナポレオンの攻め來しり時、大半は焼けて、失はれたりしも、今は、再び、繁華なり。

モスコイ府より、茫漠たる平野を、西へ行くこと三十時にして、獨逸の首府ベルリンに着く。この府、現世紀の初めには、人口十萬にも足らざりしが、獨佛戦争後、遽かに隆盛となりて、今は、百七十萬の人口を有し、繁

*



瑞西ネハ湖畔の景

榮、歐州中、第三に位す。獨逸は、醫學を始め、諸般の學問の進歩せる國にして、大學校の數二十五、その教授二千人、學生三萬人の多きに達せり。

ベルリンより、汽車にて、南行し、八時

間にして、オーストリヤの首府ウィennaに着く。オーストリヤより、西行十餘時間にして、^{スイツァーランド}瑞西に入り、ゼネバ市に達す。市は、ゼネバ湖の畔にあり、風景秀麗なり。この國は、我が九州程の小國なれども、諸強國の間に立ちて、よく、その獨立を維持せり。又、時計の製造に名高く、現今用ひらるゝ世界の時計の三分の一は、こゝにて製出せらるゝといふ。

ゼネバより、又、佛蘭西に入り、東南に旅行

して、伊太利に出づ。佛蘭西と伊太利との國境は、有名なるアルプス連山にして、四時大かた、雪を戴き、容易に越え難き處なりしが、三十年前、墜道の工事成りてより、僅々二十五分間にして、通過するを得。

彫刻
伊太利は、歐羅巴の古國なり、其の昔、隆盛を極めし頃の建築、彫刻など、今も、ローマを始め、諸都府に残れり。ローマより、ネーブルス港に赴きて、汽船に乗り込み、地中海に出で、東航して、希臘に立ち寄り、古代の名都

アゼンスに遊び、さて、又、船を、東南に進めて、
埃及のアレキサンドリヤ港に着す。

埃及は、世界最舊國の一にして、彼のピラ
ミッド、獅身像などは、皆、當時の遺物なり。こ
の國、今は、土耳其國の領地となれり。

アレキサンドリヤより、東行して、スエズ
の運河に至る。運河は、長さ四十里、幅五十
間あり、三十年前の開鑿に係る、西洋より、直
ちに、東洋に通ずる要路なり。

第六課 夕 照

静かなる秋の空に、ちぎれくに、たゞよ
ひたりし浮雲、いつしか、西の方へ移りゆき
て、日漸く、かたぶきぬ。風も吹き絶えたる
夕かたの青空、しばらくは、水のように澄みて、
天地共に、静かなり。

太陽の山の端に近づくにつれて、紅はい
よいよ加はり、まばゆかりし光輝は、やうや
く減じ、譬へば、巨大なるほゞ、つきの如く見
ゆ。今や、残りの光線をば、悉く、天の一方に

放つて、没せんとす。

空は、見るく、一面の紅となりぬ。周圍の雲までが、一時は、紅をあびせかけられたる如くなりて、或は淡く、或は濃く、薄紫となり、薔薇色となる。やがて、たゞよへるちぎれ雲は、金、銀、琥珀などの碎片の様に輝きて、飛び散り、群れる雲は、或は、黄なる旗をひるがへしたるが如く、或は、あかね色の袂を吹き靡かしたるが如し。その彩、見るうちに變化して、紫となり、鼠色となる。

※ ※ 薔薇色 琥珀

※ 日は、既に、没し盡しぬ。雲は、五彩をすてて、盡く、薔薇色となり、名残の光、瞥くは、天の一方に輝く。

夕風、涼しく吹き渡れば、浮へる雲の影、いつしか消えて、次第く、に暮れそめ、星、一つ二つ輝き出づる頃には、大空、鏡の如く青し。

第七課 日蝕月蝕

東西共ニ、世ノ未ダ開ケザリシ頃ニハ、日月ノ蝕ヲ忌ミ恐ル、コト、甚シカリキ。

※ 兆

或ハ神ノ怒ト解シ、或ハ、戦亂ノ兆トナシキ。
サレド、理學上ヨリ見レバ、天體運行ノ自然
ノ結果ノミ。

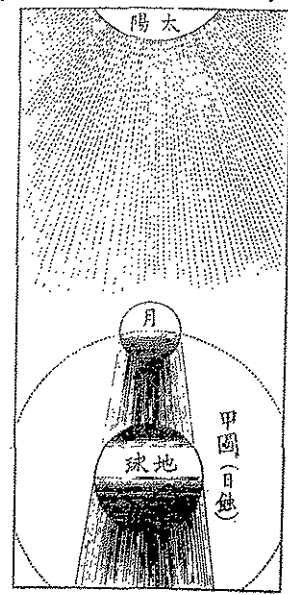
ソモ、月蝕ハ、如何ニシテ起コルカ。

夫レ、月ハ、モト、光アルニアラス、其ノ光リ輝
クハ、太陽ノ光ヲ受ケテ、更ニ、之レヲ反射ス
レバナリ。サレバ、地球ガ、月ト太陽トノ間
ニ挟マルトキハ、月ハ、太陽ノ光ヲ受ケ得ザ
ルガ爲メニ、忽チ、其ノ光ヲ失フ理ナリ。之
レヲ、月蝕ノ由來トス。

然ラバ、日蝕ハ、如何ニシテ起コルカ。他
ナシ、月ガ、地球ト太陽トノ間ニ入り來リタ
ル結果ナリ。地球ノ或部分ハ、月ノ爲メニ
遮ラレテ、太陽ノ光ヲ見得ヌコト、譬ヘバ、掌
ヲ、我が眼前ニ立ツレバ、カナタノ電氣燈ノ
見エガタクナルガ如シ。

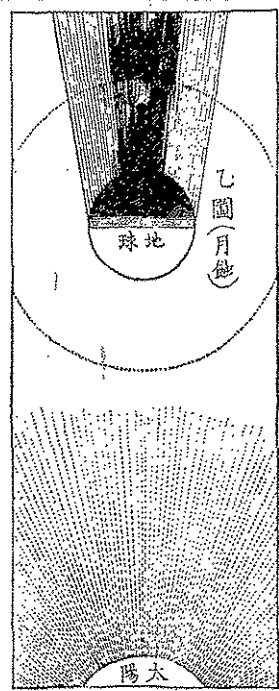
此ノ兩圖ハ、右ノ理ヲ示セルモノナリ。
甲ニ於テハ、月、日光ヲ遮リテ、月ノ影、地球ノ
一方面ニ落ツ、此ノ時、其ノ地方ニテハ、太陽
ヲ見ルコト能ハザルナリ。是レ、太陽ト地

*



謂月蝕ナリ。月蝕ハ、満月ノ時ニ起コル。月ハ、一年、

* 軌道



在ルコトハ、甚ダ稀ナリ。日

凡ソ十二回、地球ノ周邊ヲ廻ルモノナレバ、日蝕月蝕ハ、毎年、凡ソ十二回ツツ起コルベク思ハルレド、實際ハ、然ラズ。夫レ、地球ノ軌道ト、月ノトハ、凡ソ五度ノ交角ヲナセルガユエニ、月ト地球ト太陽トガ、一直線上ニ

月ノ蝕モ屢ナル能ハザルナリ。兩蝕合ハセテ毎年七回ヨリハ多カラズ、二回ヨリハ少カラザルヲ例トス。

日蝕、月蝕共ニ其ノ全體ノ蝕スルコトハ稀ナリ。其ノ一部分ノミナルヲ通例トス。カクノ如キヲ帶食ト云フ。月蝕ハ、月面ノ東部ヨリ始メテ、西ニ終リ、全蝕ノ時ハ、二時間ヲ經過ス。日蝕ハ、太陽面ノ西部ヨリ始マル。其ノ全蝕スルヤ、地上ニ落ツル月ノ蔭影、甚ダ小ナルヲ以テ、其ノ區域ハ、僅カニ

直徑、百五十哩ニ過ギズ、而シテ、全蝕ヲ見得ルハ、月影直下ノ地方ノミ。要スルニ、太陽ノ全蝕ヲ見得ルコトハ、甚ダ稀ナリ。

第八課 土 質

※ 曝 ※ 雨滴、石を穿つ。と、諺にもいへる如く、岩石の堅固なるも、久しき歲月の間には、雨露、風雪に曝されて、其の原形を失ふに至る。古き石燈籠、石碑などの、雨露に損じたるを見ても、其の理をさとるべし。

※ 壤

凡そ、空氣と水とは、岩石に觸るゝこと不
斷なれば、遂に、之れを崩解し、粉碎する作用
あり。其の碎けたる岩屑は、更に、愈、細かく
碎けて、粉末となる。土壤の元は、是れなり、
名づけて、底土と云ふ。

※ ※ 窒素

土壤は、岩石の粉末に、腐敗せる動物質、植
物質の混じたるものなり。農作物を養ふ
に足るが故に、耕土とも稱す。蓋し、腐敗せ
る動物質は、頗る、能く、濕氣を保有す、是れ、
土壤をして、濕氣あらしめ、且つ、窒素を植物

※ 礫 埴土

に給與する源となる所以なり。

※

土は、其の含有せる鑛物質の種類により
て、埴土、砂土、壤土、礫土等の數種に分かたる。
埴土は、其の粒、甚だ細かくして、粘着力に富
めり、故に、或は、粘土ともいふ。この土は、植
物を成育せしむるに便ならず、空氣の流通
よからざればなり。砂土は、其の質粗くし
て、多量の砂を含めり、空氣も、水も、甚だよく
流通する故に、耕すに便にして、農作物の栽
培に適す。但し、養分乏しく、乾燥に過ぐる

が故に、植物を枯死せしむることあり。壤土は、埴土と砂土との混合物なり、埴土の如くには粘着せず、砂土の如くには乾燥せざるが故に、頗る、植物の生育に適す。礫土は、多く小石を含み、養分を缺ける土なり。加ふるに、乾燥し易ければ、耕作用に適せず。

凡そ、土は、處を異にするにつれて、其の質をも異にする定めなれば、そこに生育する植物の如きも、亦た、常に相異なるを例とす。臺灣の甘蔗、薩摩、櫻島の蘿蔔、阿波の藍、紀伊

の蜜柑、山城の茶、上野の桑など、地方くゝに、特有の農産物あるは、この理による。

さもあれ、地味は、必しも、變化しがたきにあらず。肥料の種類、手入れの方法等によりて、多少の變更をなし得べし。瘠地をも、沃土となすべく、甲の物にのみ適する土地を、乙の物にも適せしむるを得べし。世の農業に従事する者は、地味改善の法を知らざるべからず。

* 瘠

第九課 畜産

畜産業とは、牛、馬、羊、豚、雞などを養ひて、或は、労働を助けしめ、或は毛、乳汁、肉、卵等を提供せしむることをいふ。

從來、我が國にては、耕作、養蠶、製茶などを主なる農業としたりしゆゑ、畜産業は、今尚ほ、盛大には行はれず、隨うて、手慣れざるが爲めに、面倒に思ひ、着手をたゆたふも少からねど、そは、大なる謬りなり。畜産は、むづかしき業にあらず。

*

手近き例を示さんに、或農家に、雞ずきの少年ありて、十一二の頃より、雞十羽ほどを飼ひはじめたりき。農家のことなれば、周圍に、廣きあき地もあり、田畑もあり、秋は勿論、夏も麥を取り入るゝ頃には、穀類の落ちこぼれなど、乏しからねば、餌には、費用を要せざりき。

*

はじめ、少年は、父に乞ひて、夜、雞をいれ置くべき小舎一棟を建て、設けたり。こは、單に、とやとしてのみならず、犬、猫、鼯などを防

棟*

*

賣

大

高等科生後月考

三十一

富山府

*塵塚

く爲めに、缺くべからざるものなりき。少
年は、毎朝、登校前に、餌と水とを與へて、悉く、
雞を、あき地に放てり。彼等は、隨意に徘徊
して、或は桑畑に、或は塵塚に、餌をあさるを
例とせり。かくて、放課後に、歸宅すれば、又、
水と餌とを與へ、或は、其の日、産める卵を取
り、収め、或は、小舎を掃除し、或は、一羽くくに、
羽蟲を除き、さて、夕方となれば、一同を呼び
集め、導きて、とやに入らしむ。かくするこ
と、一日も違はざりき。

* 混做

* 卵化

十羽のうち、雄は二羽、雌は八羽なりしが、
冬季、換羽の節を除きて、日々に産む卵の數、
平均四個なりしかば、一個、一錢五厘と見做
せば、月々、平均壹圓八十錢、一年に積もれば、
貳拾貳圓程の収益なりき。加ふるに、時々、
卵を孵化せしめて、次第に、若き雞を育て、老
いたるを、問屋に賣り、拂ひければ、翌年の暮
の利得高は、貳拾五六圓ほどに上りき。
かくて、怠らざること五年、其の間の收入
は、すべて、銀行に預け、れば、高等全科卒業

[※]首尾

の頃には、預け金の高、利子を併せて、三百餘圓の多額となりぬ。やがて、それを學資として、或農學校に入りしが、首尾よく、三年の課程を了へて、學識ある農業家となりきといふ。

十羽の雞を飼養してすらも、かくの如し。まして、多くの畜類を飼養し、其の方法、其の利用、共に宜しきを得たらんには、小は、一家を富ますに足るべく、大は、國家を利益するに足るべし。

※

我が國の畜産業も、近時、日を逐うて發達せんとす。然れども、之れを、諸外國の盛況に比すれば、尚ほ、甚だ微々たるのみ。

濠洲オーストラリアは、世界の牧場と稱せらる。其の牧畜の起原は、尚ほ、僅かに、百年ほど前たるに過ぎざれど、現在の家畜の數既に、一億二三千萬頭に上り、牛ばかりにても、二百萬頭以上ありとぞ。年々、内地にて消費する分を除き、單に、英國、其の他へ輸出する肉のみをいふも、無慮三百萬磅ポンド、即ち、我が國の三千萬

言
一
一

圓以上なり、といふ。其の盛んなること、想
ふべきなり。

牛馬の使途、年毎に廣まり、肉、毛織物の需
要、日々に加はりゆく今日に於ては、畜産業
の進歩、發達は、最も望まましき事の隨一なり。

第十課 蘇 武

風颯々の秋ふけて、

節旄軽く命重し。

千里萬里の路こえて、

匈奴

深く匈奴の國に入る。

野邊の草木や鳥の聲、

聞く物の音も、見る色も、

いづれか、えびすのものならぬ。

思へば、遠く來つるかな。

流れ行く水、音たて、

胸に、愁ひの波高し。

故郷、母あり、雁鳴きて、

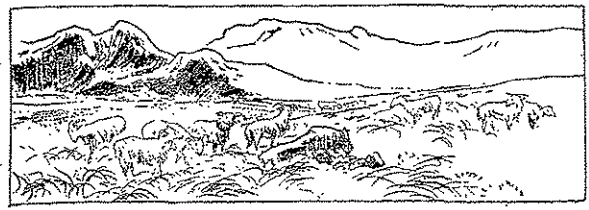
老の寢覺や、いかならん。

よしや、幾夜の草枕、

※ 愁 ※ 半

寶 下 易 半 正 是 用 未 八 二十三 一 一 子 究 文

* * * * *



旅寢の空に果つるとも、
 國家の爲めに盡すべし。
 君命重く、身は輕し。
 からと覺悟は、定まりぬ。
 使命、つぶさに傳へつゝ、
 匈奴の王に面接し、
 蘇武は、國書を呈しけり。
 もとより、非道の王なれば、
 國書の旨意は聽かされど、
 單身、敵地に使ひせし。

幽閉



蘇武が勇氣を惜みつゝ、
 ある時、蘇武を召しよせて、
 降り仕へよしかあらば、
 重く、汝を用ひんと。
 説き、諭せども、聽かされば、
 國王、大いに怒をなし、
 蘇武をとらへて、荒山の
 岩窖の中に幽閉し、
 食を與へず、苦むる。
 頃しも、北風、雪を吹き、

體 *

寒さ、膚をつんざけり。
飢うれば、羶毛を、雪に和し、
いのちを繋ぐ料となす。

日數経れども、死せざれば、
元びす等、怪しみ、且つ怖れ、

このたびは、蘇武を野に移し、
羊のむれをばまもらせて、

雄羊、孕むことあらば、

放免せん。とあざけりぬ。

覺悟はしても、無念さに、

* * 孕

ねむられぬ夜も、幾たびか、

一夜、雲なく、月すみて、

秋も最中の空の色。

せめては、かくて在ることを、と、

雁に託せし筆の跡。

かくて、春去り、夏來り、

又、秋の風、冬の霜、

落葉くゝの重なりて、

十有九年、夢の間や。

老いて、屈せぬ忠節を、

* * * * *

天助けてか、不思議にも、

雁の使のかひありて、

樂しきたよりぞ聞こえける。

國と國との和議成りて、

蘇武は、赦され、歸りしが、

立ちいでし時の黒髪は、

いつしか、雪とぞなれりける。

第十一課 陸軍兵の生活

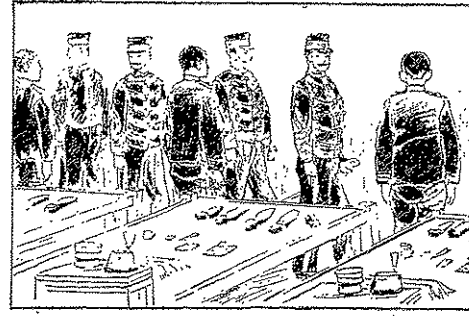
前略、入營後の模様、左に、概略申上候。

「習はらより、慣れよ。」と申す諺の如く、營内の生活も、やうく、心安く相なり候。世間にては、兵營生活は、つらきものゝ様に申しふらし候へども、そは、慣れぬ間の窮屈と不自由を申すに過ぎざるべく候。

ほゞ、御承知にも候へし、兵營内は、萬事、制規厳しく候に、始めのうちは、様子分からず候ゆゑ、一段と、物むづかしく、窮屈に覺え候へど、日を経て、慣れ候へば、左程とも覺えず候。操練とても、心得のなき身

操練

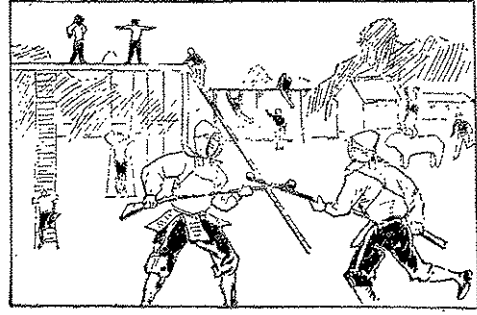
辛 *



ゆゑ、始めは、つらく覺え候へど、熱心に勉強いたせば、だんく、熟練し、上長官に叱らるゝこともなくなり、やがて、演習を、楽しみとする様にも相なり候。

演習は、夏期又は冬期などは、随分苦しく、辛きことある由に候へども、愉快なる事、面白き事も、屢々、これある由。要する

*



に、苦もあれば、樂もあるが、人世の常態ならば、兵營も、其の例にもれざるべく候。

小生は、苦を忍びて、働くが、人間の本務と心得候ゆゑ、苦樂を問はず、演習の日を俟ち居り候次第に候。

いづれかといへば、兵營生活は、甚だ單純なるものに候。戦争などが

起こり候はゞ、いざ知らず、平生は、單調子、
 一直線ながら、職務用事は、割合に、多き生
 活に候。それゆゑ、上等兵ともなり、或は、
 善行證書などをさへ、授けらるゝ様にな
 り、さて、出營するまでの月日は、甚だ長き
 様に候へども、其の實、存外に早くたち候
 由、先輩の話に承り候。

成蹟拔群の者は、二年にて、出營をゆる
 さるゝ、定めに候。かくの如きを、歸休兵
 と稱し、兵士間にては、大なる名譽といた

し候。

以上は、兵營生活の一斑たるに過ぎず
 候。尚ほ、酒保のこと、其の他、世間にて、見
 る能はざる兵營内の特別事情は、おひく
 御報道申上へく候。不一。

其師團歩兵第三聯隊第一中隊
 年 月 日 山村 幸一

第十二課 十錢銀貨の來歴談(上)

我れ、もとは、但馬國生野の鑛山にありし

* 型 忙 *

銀のあらがねなり、先年掘りとられ、精製せられて、純銀となり、明治廿六年、大阪造幣局につれゆかれて、そこに、型に入れられ、十錢銀貨といふ名を貰ひ、ゑがて、數萬の兄弟と共に、某銀行に渡されたり。それより、始めて、世間に出て、人々の手より手へ、渡り歩きの忙しき、或時は、一日に數百里を走り、又、或時は、一時間に數十個處を經めぐり、今日までの間に、凡そ日本の國內は、臺灣一つ除けば、何れの隅々も、我が知らぬは、殆どなし。

* *

この間の出來事を、一々語らんは、もとより難し。今は、面白しと思ひし二三の話ばかりを、語らん。

二年以前、我れは、某紳士の車代となりて、東京の神田區にて、若き車夫の手に渡されき。さて、其の車夫の腹がけのかくしに入られれてありしが、夕飯後、伴の車夫は、衣服を着かへ、破れ袴を着けて、宿を出づ。意外の事かなと思ふうち、とある學校の教場に入りぬ。夜學に通ふなりけり。三時間の

辻

後ち、車夫は宿へ歸り、ランプの下にて、更に、
書物を黙讀すること、十二時頃に及びたり。
さて、寢に就き、翌日は、朝五時に起き、辻に出
でて、車を引きて、終日かせぎ、夜に入れば、ま
た、學校に通ふこと、昨夜の如し。

側

かゝる苦學の書生もあり、と、噂には、聞き
たりしが、實際には、はじめて見て、ぞゝろに、
感に堪へざりき。永く、この人の側にあり
て、その行末をも見たしと思ひしに、やがて、
兄弟分の貨幣等二つ三つと共に、我れは、一

冊の書籍とかへられ、或書肆の手に渡され
たり。

かくて、書肆より印刷所へ、印刷所より職
工へと渡り、さて、件の職工より、家賃として、
或家主の家に移りしが、この家にて、我れは、
兄弟分四十九人と共に、一包みの棒に束ね
られ、同じ様の棒、數十個と共に、暗く、冷き金
庫の中に入れられたり。窮屈、退屈、忍ぶべ
からず。早く、この蓋開けよかしと、念ぜし
かひもなく、三日経ても、五日経ても、明かば

言 ス 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

こゝ、都合五個月目にして、やうくに取り出され、或小間物店の主人に渡されたり。さて、小間物屋にて、我等の一半は、品物の仕入金となりて、問屋に拂はれ、残る一半は、若干に分かれて、種々の用途に立ちしが、我れは、その中にて、地方廻りの手代に渡され、小間物の荷物と共に、上野の停車場より、汽車に乗りて、福島縣若松の近村に着きぬ。

第十三課 十錢銀貨の來歴談(下)

鎮守

かくて、宿料となりて、兄弟三人と共に、その村の宿屋に渡され、翌々日は、更らに、米代となりて、或農家の手に渡りたり。その日、鎮守の社の大祭あり、我れは、其の農家の息子、太郎吉の小使錢となりて、賑やかなる村の祭禮に伴はれ、その晩、遂に、西洋手品の木戸錢に拂はれたり。

この手品師、若松より米澤、米澤より秋田、秋田より新潟とめぐり、し聞に、我ればかりは、不思議にも、つまみ出されずして、遂

*	*	*	*
に、敦賀、大津、京都を経て、故郷なる大阪に立ちかへりぬ。日に開け行く御代のことなれば、五年以前にくらべて、かはりたる處も多かるべし。願はくは、この手品師の手より離れて、都會見物の機會もがなと祈りをりしに、或日の晝過ぎ、遂に、幸運を得て、散髪屋の手に渡りぬ。	吳服	さて、この散髪屋より、その日、直ちに、吳服屋に渡りしが、吳服屋に、二三日滞留中、新たに、錢箱に入り來りたる、あやしの貨幣あり。	

*	*
顔かたち、いさゝかも、我等の兄弟に、かはる所なけれど、どことなく、腑に落ちぬ様子あり。かくて、翌朝、我等は、集められて、數百の兄弟と共に、銀行に持ち行かれたり。	銀行にては、洋服着けたる役員、我等を一室に入れて、一つくゝに、検査を行ひぬ。この検査室には、我等の仲間、あまた居たり。大いなるズクの袋に入れられて、室の隅に集まれり。さて、役員の、我等を検査することの早さは、驚くに堪へたり。つまみて、投

*	贗造	*	藥舖
<p>ぐるよと思ふ間に、検査は終るなり。此の時、彼のあやしの貨幣は、忽ちにして、見咎められ、板の上に投げいだされしに、その音甚だ濁りたりしかば、「贗造」と宣告せられて、かたはらの籠に投げ込まれき。鋭きは、役員の眼なりけり。其の外にも、はね出されしもの、尚ほ、三枚ありき。</p> <p>銀行の金庫にあること七日にして、我れは、引き出だされ、某藥舖の預け金利息として、支拂はれき。</p>			

*	昏	吝嗇
<p>それよりさきも、處かはれば、品かはりて、見る物事に、珍しき世の中の有様、こゝに、語り盡すべくもなし。總じて、都會のかたは、取引しげければ、我れ等は、晝夜とも、殆ど、休むひまもなく、西へ東へかけあるき、ことに、晦日の夜の如きは、目も昏み、氣も絶ゆるばかりなれど、我等もと、旅行好きの生れなれば、聊かも、苦しとは思はず。物靜かなる地方の人の手に渡り、或は、吝嗇家の庫に藏められて、何個月も休みある間こそ、なかく</p>		

の苦みぞかし。我が経來りし數萬の人のうちにてても、節儉と吝嗇との別を辨へ、よく集め、よく散ずる人は、甚だ少なし。而もその自在を得ねば、財産家にはならぬ、とぞ。子供たちよくく、心得たまへ。

第十四課 世界周遊(四)

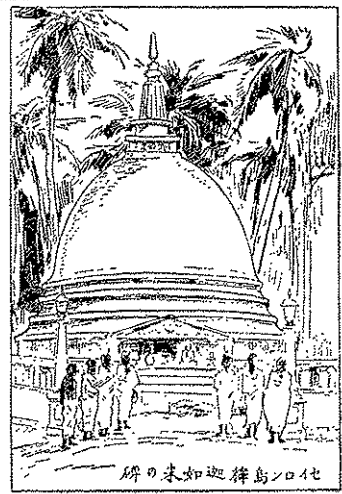
スエズの大運河を経て、紅海に出で、東方、孟買に向ふ。船、印度洋にさしかれば、暑さ、漸くはげしく、千六百餘哩の間、船は、走

れども、停まれるが如く、暑と無聊と、雙つながら、堪へがたし。

孟買は、印度の西端にある大港にして、頗る繁華なり。山野に出づれば、熱帶的植物

いやが上に生ひ、繁りて、奇樹、珍草少からず。

こゝより、更に南航して、セーロン島のコロンボ



セイロン島の如來塔の碑

※※

に着す。こゝは、政廳の在る處なり。商館あり、官舎あり、市街の繁盛すべて、我が神戸に似たり。汽車にて、カンデイ市の都に至る。古宮殿あり、又、ドラダマグワ寺といふ大伽藍あり。これらを巡覽して、再び、コロンボに歸る。此の邊にて、最も面白きは、黒奴の演劇、及び物賣等なり。碇泊の船中にも來りて、奇異なる演藝をなす。旅情を慰むるに足る。

*

船は、直ちに、シンガポールへ向ふ。シン

伽藍

絡繹

ガポールまでは、千二百十三哩と稱す。名高き印度洋の事なれば、暑さ甚だし。加ふるに、渺茫たる水ばかりを見て、行くことなれば無聊いはん方なし。

七日を経て、シンガポールに着く。こゝは、東西貿易の中心なれば、港内、船舶充滿し、市街に、巨館、軒を並べ、銀行あり、商館あり、會社あり、造船所あり、人馬絡繹たり。

船は、こゝを發し、西貢に立ち寄りて、香港に着く。其の間、七日、千數百哩の船路なれ

ば、人々皆海に飽く。

こゝは、英領の一孤島なれど、港の規模、宏大にして、繁盛、シンガポールに譲らず。こよより、便船にて、マニラに行くべし。

船は、更に、上海へ向ふ。此の間、海路、八百七十哩なり。上海に着く。港内、水深ければ、船は、埠頭に横づけにすべし。知人に案内せられて、日本旅館、東和洋行といへるに宿泊す。張園、愚園など稱する公園を始め、諸處を巡覽す。

※孤

※

※ 埠頭

※

※

上海を發して、朝鮮國の仁川に着す。歸心、ややよく頻りなり。遂に、我が長崎に向つて、出發す。船、恙なく長崎に着きしは、二日の後ちなりき。

第十五課 海外の出稼ぎ

我が國人の、海外に出稼ぎする者、年々に増加す。北米に赴くもの、最も多し。就中、合衆國のカリフォルニア、及び、其の太平洋沿岸の諸州に多く、英領カナダのバンクーバー

一附近は、之れに次ぐ。合衆國の南部アリ
ゾナ州、及び、ニューメキシコ州などに、出稼ぎ
せるものも、少からず。

カリフォルニア地方に出稼ぎせる日本人
は、其の數、凡そ五千人と算せらる。桑港（ソング、ソング）を
根據として、北はサクラメント、南はロスア
ンゼルスの間、フレズノ、ワッソンビル、及びバ
ビルカ等に散在す。其の業務は、農業を主
とすれど、季節に應じて、來去する勞働者も
あり、雜商工を營む者もあり。

されど、農業者といへども、田畑、牧場を私
有せる者は、一もなし。概して、土地の農家
に雇はれて、僅かに一弗か、一弗半の日給に
て、働く者のみ。商工業家も、また、商家、乃至、
工場に雇はれて、日給を得るを常とす。獨
立自營せるものとは、花卉の培養を業と
せる少數の植木屋、靴屋、竹細工師などある
のみ。

さて、北方は、オレゴン州、ワシントン州、乃
至、アイダホー、ワイオミング、モンタナ等の

從ふ者、材木伐り出しに從ふ者等を第一とす。他は、雜種の勞働に従事す。總數、凡そ千五百餘名なり、といふ。

又、バンクーバー附近に在る者は、大抵皆石炭坑夫なり。人數は、今、四百餘名に及べり、といふ。この邊は、鮭の産地なれば、冬季には、漁場に雇はれて、漁夫となるものも、年々千人以上あり。

メキシコ、及び、南亞米利加のペルーへも、

*

年々、多數の出稼人渡航す。されど、北米に次ぎて、我が國人の多く集まれるは、南洋の諸島なるべし。中にも、布哇に、最も多し、クインスランド、及び、ニューカレドニヤは、之れに次ぐ。布哇に在る者は、主として、砂糖製造に關する諸種の事業に従へり、近年は、其の數一萬二三千内外を上下せり。クインスランドに在る者は、白銅採掘の工事に從ふ。ニューカレドニヤに在る者と合算すれば、其の數、百名内外に及ぶ、といふ。

※
發條

これ等の出稼人は、いづれも、移民會社などの募集に應じて、渡航するを例とするゆゑに、生活上、甚しき不便を感ずることなし。單身にて渡航する者も、彼の地の會社にたよりて、事に從へば、さしたる不便に出あふことなし、とぞ。殊に、桑港附近、バンク、パー附近などにては、食物も、器具も、ゆたかに、本邦より輸入せらるゝ故に、内地に在ると大差なく、便宜多しとす。

※ ※

第十六課 米國の大財産家

米國の金傑と稱せられたる大財産家は、バンダービルト家、ジー、グールド家、アストル家、是れなり。されど、現に、新しく起つて、これ等大財産家の列に加はれるものは、アンドリ、カーネギーなり。

バンダービルト家の祖先は、コンモドル、バンダービルトといへり。今より百五年ほど前に、紐育ニューヨークの或町に生れたり。此の人はじめは、紐育とステータン島との間の渡

船業者なりしが、僅かに五十年ほどの間に、九千萬弗の身代となり、其の子ウ、ルヤムに至りて、また八年の間に、二億萬弗の身代となりぬ。三代目に當る現代は、三億萬弗の身代なり、といふ。

ジー、グールド家の祖先、ジー、バルードは、今より七十餘年前に、紐育州の一農家に生れたり。幼時は、姉妹と共に、朝夕牛乳を配達しき、といふ。十四才の時、僅かに五十錢を懐にして、都會に出て、或測量家に雇はれ、

後ちに、材木商店を開けり。但し、其の大富豪となりしは、鐵道事業に従事してよりなり。其の死にし時の身代は、實に七千萬弗なりき、といふ。世に、グールドを稱して、鐵道大王といふ。其の私有の鐵道三萬英里の延長を有し、現代の財産は、一億二千萬弗と稱す。

アストル家の祖先も、また貧家より起これり。今より百數十年前の人なり。現在の身代は、三億七千萬弗に及べり、といふ。

カーネギーは、英國蘇格蘭の人なり。

十歳の頃、父母に隨うて、米國に移住し、ピツ
バルグ市に住居し、汽罐竈の火夫より、轉じ
て、電報配達となり、電信術を見習ひ、其の術
に熟するに及びて、ペンシルベニア鐵道
會社の電信技師となりぬ。かくて、社長某
に引き立てられて、立身し、種々の新事業に
着手し、遂に、ピツバルグ市に、一工場を設立
して、製鐵事業に従ふに至れり。是れ、後ち
に、製鐵大王と稱せられて、カーネギー製鐵

汽罐
竈

※ ※ ※

※

所々長たるの盛名を博するに至りし根本
なり。其の現在の財産は、四億萬弗に達す
といふ。米國第一等の金傑なり。

カーネギーが、貨殖家として、他と異なる
點は、好著述の多きこと、慈善心に富める
こと、なり。昨年、六十二歳にて、死去せし
が、その、今日までに、諸種の學校、圖書館、孤兒
院、病院等に寄附せし金額は、既に、六百萬弗
を越ゆ、といふ。

※

※

第十七課 度量衡の原器

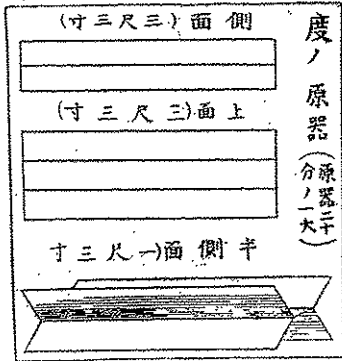
凡そ物の長短を度るには、尺を以てす。
 之れを、度といふ。容積を量るには、枡を以てす。
 之れを、量といふ。輕重を衡るには、秤を以てす。
 之れを、衡といふ。

度量衡に一定の標準なきときは、物の長短、輕重等は、人毎に、處毎に、時毎に異なることとなりて、商業上、約束上に、齟齬を來し、社會の經濟秩序の上に、少からぬ弊害を生ずべし、是れ、度量衡の原器を確定する必要あり。

る所以なり。

現今、世界各國にては、概ね、其の原器を佛蘭西に採る。即ち、度は、メートルを基とし、衡は、グラムを基とす。我が國にては、亦た、この原器を用ふ。

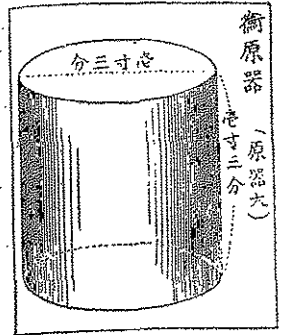
メートルの原器は、白金とイルジウムとの合金にて、製せられたり。其の形圖の如く、縦より見れば、 Σ 状をなせり。



攝氏

零度

左右の端には、標線を設け、攝氏零度に於ける、其の間の長さを、一メートルとす。蓋し、物體は、溫度に由りて、伸縮するものなれば、過不及無からん爲め、攝氏零度によりて、定めたり。一メートルの三十三分の十を以て、我が一尺とす。



衡原器 (原器六) 寸三分

グラム、其の質は、同様なり。形は、圓柱形にして、直徑も、高さも、我が一寸三分許なり。

刻 * *

其の重さは、攝氏の零度にて、千グラムなり。一グラムの四分の十五を以て、我が一匁とす。

容積を量るには、特別の原器なし。底面、各邊四寸九分の正方形にして、高さ二寸七分の方柱の容積を以て、一升とせり。

原器の製造家は、現今、世界に、僅々二三人あるのみ。而して、一器面の標線を劃するのみにても、手間料三千圓に及ぶといふ。蓋し、此の器を製するには、非常の注意と、熟

練とを要し、同一の方法を以てするも、尚ほ、
必しも、同一の結果を得難きなり。

現に、我が國の原器の如きも、佛國にて製
せしものなるが、製造の際、温度の加減など
にて、聊かの差異を生ぜし爲め、攝氏零度、一
五に於けるときの長さを、標準と定めたり
さて、其の差異幾何かと問ふに、標線間を延
長して、八里の長さとし、僅かに一寸の半、即
ち、五分の差なり、といふ。豈、驚くべき精密
を要するものにあらずや。

* *

原器は、貴重なる者なれば、各國共に、之れ
を、國庫に秘藏し、別に、副器を製し置きて、時
々檢定の標準に供す。

第十八課 短篇一束

加賀の千代

千代女は、加賀の名高き女俳人なり。幼
かりし頃、蕉門の俳人某この地に來り、けれ
ば、千代、就きて教を乞ひけるに、杜鵑といふ題
を與へき。やがて、數句を作りて、示し、に、

*

俳人

*

杜鵑

* 皆、可ならずとて、しりぞけ、り。其のうち
 * に、夜深けて、某はいねたり。千代女は、夜一
 * 夜、案じあかしぬ。某、やうく目、さめて、夜
 * 明けたり、と問ふ。千代女、言下に、
 * 「杜鵑、杜鵑とて、明けにけり。」
 * と、口ずさみければ、某大いに、嘆じて、それ
 * こそ、感吟なれ、とほめけり。千代女の名句、
 * 多き中に、
 * 「朝顔に、釣瓶とられて、貰ひ水。」
 * など、女の情見えて、ゆかし。

電 魚
 動物ノ自衛法、イロ／＼アル中ニ、電氣ヲ
 發シテ、敵ヲ防グモノ、最モ奇異ナリ。南亞
 米利加ノ大河ニ住ム、魚らふうなきハ、内臓
 中ニ、發電機ヲ備ヘテ、電氣ヲ製ス。強敵ニ
 アヘバ、コレヲ放チテ、麻痺セシム。印度洋、
 乃至、南洋ニ産スルシ、もくざめ、しびれ、魚
 ノ如キモ、同類也。學者ノ推定ニヨレバ、太
 古ニハ、夜間電光ヲ放チテ、四邊ヲ照ラシ、寢
 ネタル小動物ヲトリ食フ魚モアリキ、トゾ。

ローズの巨人像

むかし、地中海アナトリヤ灣内なるローズの島に、名高き巨人像ありき。四千年前



に鑄造せられしものにて、全身、黄銅より成れり。高さ一百尺に餘り、右手には、巨矢を携へ、左手には、巨燭を捧げ、港口を、股下にして、立ちほだかれる下を、巨艦、大船、自由に出入しきといふ。今より二千年前、大地震の爲めに、崩れて、海に

沈みぬ。今は、臺石の片影をとゞむるのみ。

第十九課 安宅

時しも、頃は、春のはじめ、風まだ寒き北國路を、いたはしや、義経は、兄頼朝の疑ひうけ、奥州さして、落ちて行く。主従、僅かに十二人、辨慶を先達に、山伏姿に身をやつし、日數程經て、加賀の國、安宅の港に着きにけり。

いかに、辨慶、旅人等の噂によれば、安宅

には、特に、關を設けて、山伏を、きびしく取り調ぶる由。いかにすべきぞ。

辨、これは、ゆゝしき御大事なり。き、と、これにて、御工夫あるべし。

へ、いや、何程の事かあらん、たゞ、打ち破つて、御通りあるべし。

辨、いや、打ち破らんは易けれども、大事の前の小事なれば、成るべくは、穩かなる手段を取りたし。

幾、然らば、辨慶、ともかくも、其の方の工夫

に任せん。よろしく、計らひくれよ。

辨、畏つて候。先づ考へ出したることは、我等、かく、山伏に、身をやつせども、包みがた

きは、我が君の御品格なり。畏れながら、暫く、強力に、御身をやつされ、御笠深く召

され、我等の笈を負ひて、わざと、後ろにさがつて、御通りあれかし。さなくば、忽ちに

見出だされ候はん。

幾、げにく、これは、尤もの事なり。

姿をやつし、主従は、やらやく、關に近づ

きて、通らんとすれば、關の役人、戸櫓左衛門。

とぞ呼ばはりける。名をなのれ。

めに、北陸道を勸進する山伏にて候。

らは、この關は、通しがたし。

頼朝、義經御不和により、

※ 帳勸進 ※

義經殿には、山伏と姿をかへて、奥州へ落ちらるゝ由、故に、諸國に、新關を設けて、山伏を、かたく止むるなり。一人も、通しがたし。

承つて候。しかし、にせ山伏をこそ止めらるゝならぬ、まことの山伏を止めたまふ必要あらじ。

あらむづかし。論より、證據なり。まこと、東大寺建立の勸進ならば、勸進帳のあるべき筈ぞ。こゝにて、それを讀み上

綴 *



げられよ。某、これにて、聴問せん。
何と、勸進帳を讀め、とや。心得申して候。もとより、勸進帳のあらばこそ、笈の中より、在り合せの、巻物一つ取り出だし、勸進帳と名づけつゝ、即智を以て、文を綴り、まことし

* * * *

やかた、聲高々と、天も響けと、讀み上げけり。戸櫓、つくづく聞きすまし。
戸もはや、疑ひ晴れて候。御通り候へ。
かたじけなく候。
げにや、紅は、園生に植ゑても、まぎれなし。後ろにしたがふ強力を、戸櫓、目早く見とがめて、
いや、誓く。その強力は、通しがたし。
とままれ。
と、のゝしりぬ。すは、我が君をあやしむ

一期は、一期の浮沈と仰天し、皆一同に立ちとまる。

辨慶さわがず、そらとほけ、

辨、やい、強力め。何とて、早く通らぬぞ。

戸、いや、それは、こなたより止めたるなり。

辨、それは又、何故。

戸、あの強力が姿、義經殿に似たるゆゑなり。

辨、奇怪千萬、義經殿に似たりとや。しかいはる、強力めは、一生の名譽ならんが

さりとは、腹立たしや。けふのうち、

能登境まで行かんと思へばこそ、強力を

やとひたるに、僅かの笈を、重げに負ひて、

人々に後るればこそ、貴人かとも怪まる

れ。憎さも憎し、いで、こらしてくれん。

金剛杖をお取って、さんぐに打擲す。

これはと驚く人々を、辨慶、目にて、制し止

め、尚ほも、激しく打ち据らる。戸、檜、やう

やく、疑念をとぎ。

戸、これは、我等が誤りなり。その強力に

はかまひなしとくく、一同御通りあれ。
いふに、人々、ほっと息、毒蛇の口を逃れし
思ひ、さらばくと、立ちあがり、關路を
あとに、しつくと、奥州さして、下りけり。

第二十課 維新の三傑

明治維新の大業は、主として、陛下の御聖
徳に成れりと雖も、輔弼の大功ありし人々
も、また、少からず。其の中、最もぬきんでた
るは、三條、岩倉の兩卿を除きては、西郷隆盛、

輔弼

*

大久保利通、木戸孝允の三士とす。世に、之
れを、維新の三傑といふ。

西郷隆盛と、大久保利通とは、薩摩の人に
して、木戸孝允は、長門の人なり。いづれも、
幕末の世に生れ
て、勤王の大志を
抱き、百難を排し
て、大功を立てし
人なり。



戊申の年、討幕

の勅下りし時、隆盛、官軍の參謀なりき。彼の幕臣勝安房と會談して、平和に事を纏め、江戸市をして、兵火の慘害を免れしめしは、隆盛の力なり。其の後、奥羽地方に、賊軍を征討して、種々の功勞ありき。



利通の功は、主として、外交にありき。征臺事件の際、全權大使となりて、北京に到り、談判の末、使命を全うして、償金五

十萬兩を得て、歸朝せり。是れ、其の一の功なり。されど、利通の功は、内治にも、多かりき。彼の、帝都を、東京に遷さるゝに至りしも、遷都の要を説きて、獻議せし利通が、主唱の力なりき。

孝允は、最も内治の功に富めり。廢藩置縣の如きも、其の率先して、獻議せし所に係る。維新の初め、政權は、朝廷に歸したりと雖も、列藩、尚ほ封土によりて、割據し、舊觀、尚ほ依然たりき。孝允思へらく、かくては、王

率先

※ ※

※

恢復 政復古も、たゞ名義のみなり。諸侯に兵力、財力の具はれる以上は、いつまた幕府恢復の舉を行ふもの出でん

も、知るべからず。此の災を防がん爲めには、諸侯をして、封土を、朝廷に

收めしむべきなり、とて、先づ藩主を説き、尋いで、薩土肥三藩主の同意を得たり。四藩連署の藩籍奉還は、實に、三百諸侯の版籍奉還の大導火なりしなり。



連署 郡縣の制、こゝに於て成りぬ。これ、主として、孝允が功蹟なり。其の他元老院、大審院の設けられしも、孝允が主唱なりき。又、地方官會議の開かれしも、孝允が建議の結果なりき。

隆盛は、大膽にして、度量ひろく、利通は、沈毅にして、果斷に富み、孝允は、機敏にして、忠誠なる人なりき。

隆盛は、明治十年に、亂を起こして敗れ、軍中にて死し、利通は、其の翌年、刺客の及に斃

れ、孝允は、其の以前に、病を得てみまかりき。

第二十一課 政治組織(二)

*

國ノ政治ヲ行フニ、諸種ノ機關アリ、此等ノ機關ノ全系ヲ稱シテ、政治組織ト云フ。政治組織ノ基本ハ、市町村ナリ。

*

市町村ハ、獨立シテ、其ノ公共事務ヲ處理スルモノトス。公共事務トハ、學事、衛生、土木等、ソノ市町村ノ公益ヲ保持シ、且ツ、之レヲ進涉スル事務ヲ云フ。町村ノ上ニ、郡アリ、郡市ノ上ニ、府縣アリ。

リ、郡市ノ上ニ、府縣アリ。

以上、市、町、村、郡、府、縣、ノ事務ヲ取扱フ町村役場、市役所、府縣廳ハ、地方政治ノ機關ニシテ、是レ等ヲ總括シテ、全國ノ政治ヲ施行スルモノヲ、中央政府トス。

町村ヨリ郡、郡市ヨリ府縣ト順序ヲ追ウテ、最高ノ中央政府ニ及ブ政治組織ハ、サナガラ、大木ノ狀ニ似タリ。末ノ方ハ小枝ノ如ク、數ハ多ケレド、全體ニ於ケル利害ノ關係輕ク、事務モ單純ナレド、本ノ方ハ、大枝又

ハ幹ノ如ク、數ハ少ナケレド、全體トノ關係ハ重ク、事務、甚ダ複雑ナリ。

中央政府ハ、以上ノ如ク、國內百般ノ政務ヲ總括スルト同時ニ、又諸外國ニ對シテ、常ニ國權ヲ保チ、國威ヲ揚グル重責ヲ負フ。

中央政府ノ任務ハ、斯ノ如ク重大複雑ナルガ故ニ、事務ノ種類ニ依リテ、省ヲ分チテ之ヲ擔當ス。即チ、外務、內務、大藏、陸軍、海軍

司法、文部、逓信、農商務、ノ九省是レナリ。外ニ、宮内ノ一省アレドモ、コハ、專ラ、皇室ノ事

務ノミチ處理シ、一般ノ政治ニハ與カラズ。各省ニ、大臣アリ、省務ヲ總括シ、地方政治ノ諸機關ヲ指揮命令スル職權ヲ有ス。各省ノ大臣ノ上ニハ、內閣總理大臣アリ、之レヲ政府ノ最高官トス。

第二十二課 政治組織 (三)

中央政府ハ、政務ノ中心ニシテ、全國ノ政治機關ヲ運轉スル樞軸ナリ。サレド、機關ノ樞軸ト、機關ノ原動力トハ、同ジカラズ。

總攬

* * * * *

政治ノ原動力ヲバ、主權トイフ。主權ノ所在ハ、國體ニヨリテ異ナレドモ、我が國ニテハ、天皇陛下萬機ヲ總攬シタマフ故ニ、主權ハ陛下ニ屬ス。サレバ、スベテノ政治機關ハ、皇權ノ補助機關タリ。

凡ソ、政治ニハ、三ノ方面アリ、立法、行政、司法、是レナリ。立法トハ、法律ヲ制定スルコトニテ、新法律ハ、スベテ、帝國議會ノ協賛ヲ經テ後チニ、公布セラル、定メナリ。行政トハ、既ニ制定シタル法律ヲ活用シテ、公共

* 訴訟

ノ利益ヲ圖ルタイプ。行政ノ機關ハ、上ハ中央政府ニ屬スル諸官衙ヨリ、下ハ、府縣廳郡役所、警察署等ニ至リ、其ノ數頗ル多シ。

司法トハ、一方ハ、法律ヲ破レルモノヲ處分シ、一方ハ、民事ノ訴訟ヲ裁判スルタイプ。

司法事務ニ任スルモノヲ裁判所ト稱シ、コレニ、大審院、控訴院、地方裁判所及ビ區裁判所ノ別アリ。

第二十三課 憲法

憲法は、國家統治の原則を定めたるものなり。主權者は、之れによりて、國家を統治し、臣民は、之れに基きて、其の權利を保護せらる。尋常の法令は、時宜に應じて、屢改正せらるれど、憲法は、たやすく改むべからざる、根本の大法たり。

憲法成立の事情と、其の性質とは、國によりて、同じからず。人民、君主に迫りて、強ひて、其の權力を限らん爲めに、定めたるもあれば、國民、協議して、定めたるもあり。然る

隨範

に、我が帝國憲法は、辱くも、天皇陛下が、皇祖
 皇宗の御遺範に則らせたまひて、臣民を思
 はせたまふ大御心より、國家永遠の大計の
 爲めにとて、下し賜へるものなり。されば、
 其の由來も、其の性質も、前に述べたるもの
 とは、同じからず。

朕
 * *
 憲法發布の詔勅のうち、
 國家統治ノ大權ハ朕力之ヲ祖宗ニ承ケ
 テ之ヲ子孫ニ傳フル所ナリ朕及朕力子
 孫ハ將來此ノ憲法ノ條章ニ循ヒ之ヲ行

愆

フコトヲ愆ラサルヘシ
朕ハ我カ臣民ノ權利及財産ノ安全ヲ貴
重シ及之ヲ保護シ此ノ憲法及法律ノ範
圍内ニ於テ其ノ享有ヲ完全ナラシムヘ
キコトヲ宣言ス

會得

と。以て、我が帝國憲法の特質と、聖旨の在
る所とを會得すべきなり。

條文

我が帝國憲法は、明治二十二年の紀元節
に、發布せられき。其の條文は、すべて、七章、
七十六條より成れり。第一章には、萬世一

*

*

*

補

系の天皇が、統治權を總攬せさせたまふ由
を明かにし、且つ、天皇の大權を擧げたり。
第二章には、臣民の權利、義務を説きたり。
さて、第三章には、帝國議會の組織、權限等を、
第四章には、國務大臣と樞密顧問官との職
責を、第五章には、司法官の地位、職分等を説
き示したり。又、第六章には、會計に關する
事項、即ち、租稅、豫算、決算等のことを規定し、
さて、第七章には、補則として、憲法改正に關
する、詳細の場合を定めたり。

服膺 日本國民たる者は、よくく、各條の明文を精讀し、服膺して、一意、憲法を下し賜はり、副 聖意に副はんことを、本分となすべきなり。

第二十四課 世界の三聖

世の中、やうやく開くれば、人の數増し、愁ふえて、渡りぐるしくなるまゝに、先づ、身を思ふならひとて、

我意、おのづから増長し、他をしへたげても、生きんとて、たとへば、森の草や木の、我れがちに延びて、競ひあふ。其のあさましき有様を、あはれみ、痛む心より、教を立て、ねんごろに、化導の任にあたられし、釋迦牟尼、基督、孔子、世に、三聖とあがめたり。

釋迦は印度の太子なり。年若うして、山に入り、難行、苦學の功を積み、究め得たりし佛陀教。世の常なきを覺悟して、我慢我慾を斷絶し、

※ ※ ※ ※



釋迦は印度の太子なり。
年若うして、山に入り、
難行、苦學の功を積み、
究め得たりし佛陀教。
世の常なきを覺悟して、
我慢我慾を斷絶し、

※ ※ ※ ※ ※ ※

情けを廣く禽獸や、
草木にまでも、及ぼせと、
斷慾、慈悲を説かれたり。
孔子は、儒教の教祖なり。
支那、周末の世に出でて、
席、暖まるひまもなく、
諸國の間を巡歴し、
説き諭されし仁の道。
わが身つめりて、痛さ知り、
我が好まざる不道義を、

賣
ト
馬蹄斗主走用卷ノ
六十一
富士号反

忠恕

ゆめく、他人に施すなと、
忠恕を、初歩に、説かれたり。



さて、猶太人基督は、
ひとへに、愛を教へたり。
我れ、蜜をなめて、甘からば、
人にも、甘きを分かつべし。

*

おのれが欲しと思ふことを、
他の人に、まづ、施せや。



あだかたきをも憎むなと
是れ、耶穌教の要旨なり。

*

* * * *

「慈悲」「仁」「愛」と説かれたる、
 その言の葉はかはれども、
 もとのこゝろの差別なく、
 つゞめては、忠恕くだきては、
 自分勝手をつゝしみて、
 身を思ふ如く、人の身を
 思ひやれてふをしへなり。
 教に根あり、枝葉あり、
 しげき枝葉に目のくれて、
 根の一なるを忘るゝな。

* * 含味 *

道、必しも峻ならず、
 徳、必しも遠からず。
 欲すれば、そこに、道通じ、
 欲すれば、そこに、徳到る。
 三教の旨を含味して、
 日々の行ひ慎みて、
 履みなたがへそ、人の行く道。

言語学 第二卷 第九号

國語讀本 高等小卷 八 終

高等小
學校用

明治三十三年 九月廿九日印

明治三十三年 十月一日發

明治三十三年十二月廿三日訂正再版印刷

明治三十三年十二月廿六日訂正再版發行

刷 (國語讀本 高等與附)

卷ノ一 定價	金拾八錢	卷ノ五 定價	金廿二錢
卷ノ二 定價	金拾八錢	卷ノ六 定價	金廿三錢
卷ノ三 定價	金貳拾錢	卷ノ七 定價	金廿三錢
卷ノ四 定價	金廿二錢	卷ノ八 定價	金廿四錢

著 作 者 坪 内 雄 藏

發 行 者 東 京 市 神 田 區 裏 神 保 町 九 番 地 山 房

代 表 者 合 資 會 社 富 山 房 社 長 坂 本 嘉 治 馬

印 刷 者 東 京 日 本 橋 區 樂 研 坂 町 三 十 三 番 地 仁 科 衛

印 刷 所 同 所 厚 信 舍



發 兌 元

合 資 會 社 富 山 房

（明治廿九年六月設立）
長 距 離 電 話 本 局 電 報 加 入 一〇三六號 電 報 號 ヤ マ フ

（電話浪花一四六番）

